

第一章 衣食住

第一章 衣食住

第一節 衣

— 仕事着・普段着・晴れ着 —

はじめに

既製の衣服を買うことがあたりまえとなった現在、家庭での裁縫といえは補修繕つくろいが主ではないだろうか。しかし、少なくとも第二次世界大戦後しばらくまでは着るものは自家で糸を紡いで機を織り、または反物で求めて家で縫うことでつくられていた。つまり、地域に染め屋などの染色職人や仕立て屋などの職人がいても、衣料のほとんどは家庭の女性の手でつくられていたのである。

また、農家の主婦の一日は忙しい。ほかの家族より先に起き、朝草刈りや食事の準備で竈かまどに火をいれるために一度土間におりと、三度の食事も、足を洗って板の間にあがることの寸時を惜しんで土間に立ったままとる。休むこともほどほどに、再

び田畑に戻ると日が暮れるまで一日中を男たちとともに野良で稼ぎ、一日のほとんどを土の上で過ごす生活の繰り返しであった。家にはいるとつかれた身体を休める暇もなく夕食の準備や風呂の焚き付けにとりかかり、夕食の間も女たちの役目は子どもをはじめ家族の世話が主であり、自分はどこへ食べ物をかきこんでいるのかわからないまま食事をすませると、食べ終るのは最後になる。男衆が風呂にはいり、くつろいでいる間も膳碗の後片付けや洗いのものと忙しく、それがすむと夜なべ仕事に續いがはじまるのであった。

また、農民のくらしぶりは特に質素で、どの家でも衣食などは自給自足があたりまえで、盆や祭り、冠婚葬祭など特別のことがないかぎりはお金を出して物を買うということはしなかった。

奥州道中の宿場として栄えた「矢吹」にあっても例外ではない。支出の権限は家長が一切を握り、一家の主婦には自由にならなかったこともあって、着るものでも長男から次男へと目下の者に着古しをゆずる「オサガリ」はあたりまえで、大人のものを子ども用に仕立て直したり、山着などは布地が傷めば当て布をして補修補強を繰り返し、継ぎ接ぎだらけで元布の柄がわからないうほどだったという。さらに裏返して着たりはいたりもした。古着をほどこして子どものオムツ（シメシともいう）にし、端布で見舞い袋（キンチャク）をつくり、布を裂いて山帯に再利用し、最後は雑巾にして再々利用するなど無駄にすることがなかった。また、新しいものをおろすときにも破れやすいところを特に入念に刺し子をしてからおろすことなど、物を大切に、少しでも長く着ることに女のだれもが心掛けていた。

こうした利用再生と物を大事に使用する心構えは、当時の女性にとつてはあたりまえのこととて、かつ、大事な素養でもあった。現在でも大切な心構えの一つであるはずなのだが、どちらかというと使い捨てて新しいものを買うことが多いようで、近代的な生活という美名のもとに、物に対する考え方が歪んでしまっているように思われる。

一 くらしと衣装

繊維・衣料素材 矢吹町での衣料の素材をみると、周辺のほかの地域と大きな違いはみられない。

のいろいろ 今回の調査では麻・木綿・絹・毛織物などが古くから使用されていたことが聞かれたが、採集された仕事着や普段着は汚れても丈夫で長持ちする木綿製のものが多く、普段着などに使う絹は出荷などできない屑繭くずぎから糸をとって利用したものが残るだけであった。

また、栽培、生産したものだけを使って自家で着物を織りしつらえたという話は聞くことができなかった。

中畑では棉の栽培が昭和十年ごろまでおこなわれていたが、紡ぎ手がなく、栽培された綿を使って自家で織ることはできなかった。栽培棉のほとんどは布団や寝着、半纏などの中綿として使われ、それ以外は販売していたという。こうした話から、大正のころにはすでに自家で生産して織った用品はなかったと思われるが、昭和十年ごろの話として、木綿糸を白河の糸屋から買い、普段着やヤマカワ、布団などは自家でも織っていたとも聞いている。このころは、ほとんどの農家は木綿布として反物で購入している。中畑では木綿地のボロ着物を白河の糸屋に持つていって糸にしてみらい、自家で織ったという。

長峰や弥栄などの開拓地でも棉を栽培していたというが、紡いだという話はなく、それ以外の地区では棉の栽培そのものを聞くことはなかった。

養蚕農家では、屑繭を使って自家用の絹布を織ったり、絹糸を紡いで縦糸として使った。

田内では麻やカラムシの栽培もおこなったが、もっぱらハヨナワなど縄の材料として使った。麻は下駄の鼻緒などにも使われた。

そのほか、古着を裂いた布を経糸（たて糸）にし、屑繭からの絹糸を緯糸（よこ糸）として織ったものに山帯があるが、それ

以外の衣類は反物を買ってきて繕っていた。

しかし、被^かり物、手甲、下駄はともかく、アシナカ、草履^{ぞうり}、藁靴などの履物や着る蓑など家族が身につけるものほとんどは農閑期や夜業でつくる自家製品であり、衣類の準備と管理にかかわる一家の女の人たちの役割は大きかった。

着物は買うこともあった。ボロ着売り（古着売り）が石川町野木沢や白河からきた。反物も須賀川から背負^{せお}つ小商^{こあやう}いがきて買うこともあったが、三城目ではムラ内の中村屋や矢吹宿の亀屋などの呉服屋があつて大概はこうした所から購入した。田内・三城目などでは、さらに少し足を伸ばして須賀川に、中畑などでは白河に織り糸や反物を買いくこともあった。矢吹町での行商人のかかわりは衣類のほかにも大きく、戦前は泉崎から卯買、須賀川や郡山から魚屋、須賀川から饅頭屋がきていた。

ナイロンなどの化学繊維は、第二次世界大戦後になつて衣料素材として使われた製品そのものではない。糸など、素材での自家による直接利用はない。

今回の調査において、矢吹町では仕事着や普段着は木綿製のものが多かった。つまり、時代的には大正以降、昭和からのものが中心であるといえる。また、こうした栽培、生産物からの利用のほかにも、仕事着は汚れ破れて着れなくなることは当然あつたので、破れても捨てることなく洗い張りをしてつぎあてに使つたり、また、細く裂いて材料として大いに利用した。これを「裂き織り」といい、裂いた布を緯糸に、経糸には木綿糸や絹糸を使い、ボロ帯（山帯ともいう）を織つた。裂き織りは丈夫で解けにくいので仕事着に向いていた。

織

り

機織^{はたオリ}のことを一般に「ハタシ」とよんでいる。大概は床に座り作業する腰の低い「ジバタ」が多かつたが、次第に椅子に腰をかけておこなう「タカバタ」が使われるようになった。

縞物を織る場合、「縞割り」といって縞の目を読み、糸の順番を間違えないようにそろえることが重要で、非常に苦労することであるので、織つた縞の柄を厚紙にはり付け、見本とした帳面「縞見本」を代々伝え残すことがある。

田内の小磯輝子は母親から柄織りの技術を教わつたが、全てみて聞いて覚えただけであつて、「縞見本」などはなかつたという。

着物は、糸と布地の種類によってさまざまな織物ができ、その性質によって用途にあった着物に仕立てられていった。

・木綿縞……………木綿の縞織りで、山ジユバンやモンペに使われた。

・ニコニコ……………木綿織りで、普段着の袷あわせや半纏はんてん、綿入れなどに使われた。

・ガスメイセン……………経糸に絹、緯糸に木綿を使って織られ、一重物の袷などに仕立てられた。ちよつとした外出着に仕立てられることが多かった。

・メイセン……………銘仙。密に織った平織りの絹織物で、主として屑糸くずを使うので丈夫で安価。袷や羽織などの一重物などに使われた。外出着に仕立てられることが多かった。

・羽二重……………経糸緯糸に良質で撚ひねりのない生糸を使って平織りにした絹織物で、キメが細かく艶があり、柔らかく、肌ざわりがよい。袷や羽織、礼服などに仕立てられた。男物が多かった。

・チリメン……………縮緬。経糸に撚りのない生糸、緯糸に撚りの強い生糸で縮みを持たせて平織りにした絹織物で、女物の長着や襦袢じゅばん（ジユバン）などに仕立てられた。

・キンシヤ……………金紗縮緬の略で、縮緬の一種。織る糸は五個以上の繭を使わない薄手の絹織物で、表面が細かく艶があり、柔らかい。女物の袷や羽織などに仕立てられた。

・メリンス……………モス、モスリンともいう。細い糸の薄地の柔らかな羊の毛の織物で、ジユバンやヨツミなど子どもの着物に使われた。

・ウール……………羊の毛織物で、厚手で毛羽立っている。毛糸にも使われ、道中着やアンサンブルなどに仕立てられた。

染めと型紙

染めの型紙は自家で染めをおこなっていた時代の残存品で、すでに廃棄したという家が少なくなかった。

矢吹町の農家は矢吹の「亀屋」呉服店で買うことが多く、田内には「亀屋」の配った染め見本がみられたが、それ以外にはみることができなかった。

草木染め

個人でおこなってきた草木を原料にして糸を染める「草木染め」は、化学染料が明治の終りごろから大正時代にかけて広く出回るようになると、次第におこなわれなくなっていた。

衣の入手

ほかの地方と同様に矢吹町でも衣類にお金をかける経済的なゆとりはなく、糸を紡いで自分で染めて織るといった自給自足の生活を原則としていた。

矢吹町でも養蚕が盛んにおこなわれたので、商品にはならず出荷されないうで残った屑繭は自家で糸をとるために用いる。煮立った湯の中に屑繭をいれ、繭の中のサナギを殺してミゴで繭糸の先端を拾い出し、三個から五個の繭糸を乾きかたまつてしまわないように手早く撚りをかけて一本の糸にする。

糸ができあがると、糸を紡いでおいて農閑期にジバタでボロ帯などを織る経糸に使った。

また、山際には戦前までは麻が栽培されていた（麻の畑をオバタケといった）。成長し、指の太さほどに太くなった六尺ほどの麻をひき抜いて根元から切り、主屋のエンメエなどで広げ乾燥させ、乾燥後に同じ太さごとにわけて釜でふかす。再度乾燥させたり熱湯をかけて皮を腐らせ、剥きやすくなった麻をし

【表1】矢吹町周辺での草木染め一覧

色	染 色 材	資 料 名
茶	山クルミの皮・カシワの木の皮・カヤスリ	表郷村文化財調査報告
	山クルミの皮・カシワの木の皮	失われ行く百姓の心
黒	メグスリノキの皮	同 上
赤 茶	サワナシの実・クルミの生実	同 上
焦 げ 茶	ザクロの実の皮・黒マメの煮汁・ハンノキの実	同 上
らくだ色	クルミの実の皮・クルミの葉・タマネギの皮	同 上
肌 色	梅の木・山桜の木	同 上
灰 色	ハンノキの生実・桐の燃やし炭の粉・樫の葉・	
	クリの木の皮・クリの実の皮	同 上
紺 色	ナスの茎の燃やし灰	同 上
黄 色	キハダの皮・桐の根	同 上
薄 黄 色	ススキ	同 上
白い茶色	クスギの皮	同 上
紫	オトギリソウの花	同 上
橙 色	ハンノキの皮	同 上
青 茶 色	カヤスリ	同 上
金 茶 色	干した茶がらの煮汁	同 上
真 黒	ドングリとクリの皮の沸湯に田の泥土を混ぜた煮汁	同 上

こいて繊維をとり出して水で洗い、乾燥させると麻糸ができる。乾燥した麻糸は民家調査の折に、家の中の板壁にさがっていたり、蔵の中にあるのを見ることがある。主に布や藁に混せて下駄の鼻緒に使われた。

自給自足の生活の中にも次第にゆとりができ、かつ社会情勢も変化してきてからは、古着売りがきたときに買い求めることも多くなった。どの地区でも大抵は地区内、または近くの雑貨屋や呉服屋で反物を買って自家で縫い、染めを染め屋（ソメヤ・コシヤ・コウヤなどという）に出したり、また既製服を呉服屋に求めたりするようになった。

矢吹町の農家は矢吹の亀屋呉服店で買うことが多かったが、上物を買うとなると中畑地区では白河に、田内や三城目などでは須賀川に買いに出ることが多かったと聞かれた。

衣に関する諺

矢吹町には、衣食住をはじめ生活全般に関するさまざまな諺ことわざが残っている。衣に関する諺も多く、「なぜ、そういうのか」といった理由は伝えられていないが、矢吹町での考え方であり、しつけ（躾）としての意味合いをなすものもある。

今でこそ俗信も含む広義の諺には意味のない、迷信としてとらえられるようなものもあり、役には立っていないように思われているが、学校教育制度が整わず文字よりも話し言葉が主な伝達手段であった時代には、言葉の威力は想像する以上に強かったと思われる。諺はわかりやすく、地域社会においてだれもが共通に認識できる言葉であり、諺は、しつけ・教訓・道徳・常識として守られるべき重要な意味を持っていた。

ここには、矢吹町で聞かれた衣に関する諺を書き留めておく。

- ・ 紐（ヒボ）を縫いつけると、長さを左右それぞれ違う長さにするものではない。同じ長さにつける。
- ・ 普段、着物を着るときは左前にしては着ない。
- ・ 着物は、洗濯して一度たたんでから着る。
- ・ シツケ糸をとらずに着るものではない。

・火事るとき、風下の家で女の赤い腰巻を火に向かって振ると、火除けになる。

・褌ふんどしを高い所に干すと天気が悪くなる。

・褌が湿ったときは天気が変わり、雨になる。

・死者の洗濯物は逆さに干す。

・着物を裏返して着るな。

・着物の袖を被るな。

・着物を縫うときには、その日のうちに両袖をつける。

・出針をしない（出かける前には、針を使つての繕い仕事をしない）。

・新しい下駄は午前中におろす。午後におろすときには鍋底のススをつけてからおろす。

・新しい下駄をおろすときは、下駄の歯に唾をつけてからおろす。

・目上の人に履物を贈るものではない。

・田植えのときの着物を洗わないでよくと、いつまでもつかれがとれない。

・箒はきを玄関に立ててよくと、客は早く帰る。

・蓑かさを被ると、背が伸びない。

しつけ・行儀作法

明治五年に学制を發布し、国民皆学の方針のもとに一般庶民にも教育の場が設置されて、学校では修身教育にあわせて礼法教育が進められたが、当時の就学率は三割程度ともいわれている。

しかし、しつけ・行儀作法の基本的なことは学制以前から、身分階層や職業の別なく、先ず家庭で、そして地域社会の中でおこなわれてきた。人間としての道徳心を含めて家庭や住む地域で日常の生活に必要なこと、規律を「三つ子の魂百まで」の諺のように人生とおして活かされることを期待して、幼いときから日常の生活の中で、少しずつであるが身につけてきてきている。

そのひとつとして、身近で簡便な諺がその手段として大きな役割を担っていたと考えられる。

地域にとっては家庭と相俟^{あひま}って、そこでのくらしを守るために、地域を乱すのではなく、その地域の規範から外れない「人並み」の人間を育てなければならなかった。その方法として、子ども組から若者組（若衆会・青年会）などの年齢層別の組織、場があり、先輩から後輩へと教えられ、秩序が維持される仕組みとなっていた。生活に追われ、教育に対する認識があまり高くなかった農村部などでもその土地のしつけとして厳格におこなわれていた。

こうした背景には、仏教や儒教思想、礼節を重んじる考え方が社会末端まで定着していたことがある。

しかし、生活圏がせまい時代は、こうして身につけたものが崩れてしまわないように家族をはじめ周りの者が注意し、しつけのうえにさらにしつけて徹底されてきたのであったが、特に第二次世界大戦後は、社会の考え方の変化や地域の中の生活範囲が広がってつきあひもかわり、かつ地域社会の注意はいき届かなくなり、最近はしつけも学校に任せるような親さえ出ている状況がみられる。

隣村玉川村には、当時の農民生活にも大きな影響を与えたと思われる「當（当）流牝^{マデ}（牝）方指南^{しつけ}」という近代資料が残っている。内容的には普通、一般的で独特なものはみられないが、当地方の生活基盤と社会規範のようすを考える意味で貴重であるのであけておく。

當流牝方指南

當流牝方者尊氏將軍之孫ろくおん院義満將軍の時、今川左京太夫氏より小笠原兵庫頭、長秀、伊勢守光忠此三人におふせて牝方の書をあましめ、小笠原を當流とす。

一、人の前二而やふじをつかひはをみがき、舌をかき、又やうじ

くわえて人に物いふまじき事

一、茶の水を手足二つかひ、又は手水二て足あらふまじき事

一、朝うがいちようづせず、髪を結わず、袴をきずして人の前に

出ル事

一、客人へおそく出てあふ事

- 一、戸障子あらく立あくる事、并縁板あし音たかく歩く事、人之近二而高はなみ、さうだん高嘶、并深夜の高声つつしむ事
- 一、客の手水手ぬぐいをみだりにつかい人のあせ手拭い二而汗をふき、或は扇子を引ばいつかう事
- 一、おし板敷居るりの縁へ上り、炬燵へふかくいる事
- 一、手水かまへに小便する事
- 一、机にのぼり、あるいは人のものかく処二あたり、人之覗そばより使う事
- 一、盤のあそびあかり先二而見る事、同助言する事
- 一、親方かましき人の異見いふ事
- 一、他に行状折紙をひらき見る事
- 一、他の女房けしからず見る事
- 一、女房衆の前に而さんげ物語すべからざる事
- 一、仁たる前二而あせぬぐう事
- 一、仁たる家内にむざと入る事、或はあるじの留守に長居致すこと
- と
- 一、人の前二而爪を切、亦はかりながらぬぐわずして返す事
- 一、他のはきものをむざとはき又ははき違へ、或者上を踏む事
- 一、人の寝畳筵を踏或ハ枕を越る事

- 一、かんぎん所二而うたひ舞ふ事
- 一、人の雑談を語り直し或は雑談之うちまた別の物がたりする事
- 一、人の盃戴かずしてのみ、又たまはるさかないただかずして喰ふ事
- 一、我さかつきふかずして主にさし、亦是貴人の盃長びかへする事
- 一、酒の中場にてむざと立事
- 一、杓にたち膳を居るとき身をかき、亦是口をきく事
- 一、膳をひくく揃すすへ、或はかた手二而居る事
- 一、酒もりの席へ白衣二而出る事
- 一、的場或ハ山野酒盛の場に乗打すべからざる事
- 一、からず并的山と岩之間を通るべからざる事
- 一、石を立たる庭にはきものはく事
- 一、弓馬之藝にはかま着ざる事
- 一、さうりをはきて馬せむる事
- 一、絵讀手跡むざと誉る事
- 一、人の前二而袴を着、又はぬぐ事
- 一、高位へ悪筆二而状つかはし又あく紙にて書く事
- 一、我二字名字一字書事

一、人之名字かなにかく事

一、ひねり文字のかしらをなかくひねる事

一、折紙封せずして遣る事

一、親類として上座をはる事

一、同輩二而茂無礼にして新盃の事

一、人のゆかたにてむざと身をふく事

一、天氣のよきに木履はく事

一、分もなくして上座好事

一、人々前二而じやうぎを用る事

一、位なくして判を大きにすゆる事、并状折紙に印判を用事

一、鞠の場はきものはくべからず、同まり場の木と軒の間を通べし

右五拾一ヶ條者三儀一統之馳方なり、士農工商共二為二、男者馳方を知らざる者人中に交事なすべからず、人々心懸たしなむなべきこと也

此方馳方様々ありと言え共 初心之ためあらましかくの如し

当流驍方指南

終

小笠原流は本来驍方指南としての民間に啓蒙などはおこなわない、小笠原長清を祖とする武家故実を司る家柄であり、分かれて京都小笠原家、総領家、平兵衛家（赤沢家）などの流派がある。江戸時代、徳川幕府の諸礼は京都小笠原家の流れである縫殿助家と平兵衛家が担っていた。本資料には「小笠原流驍方指南」とあるが、その来歴、意味するものまで知ることはできない。

一方、矢吹町資料所在目録第二集をみると、小笠原長時はか九名の名がある「文政十二年五月祝儀献立表」が円谷善人家に残されている。長時は総領家の流れをくみ、信濃深志城主のときに武田信玄との戦いに敗れた後、越後・伊勢・京都を経て会津にいたり、ここで礼法を大成し、天正十一年（一五八三）に会津で没している。詳細をここで述べることはできないが、南会津や県南にはこうした小笠原流とする驍方指南・婚礼儀式の礼法資料が残っている。

二 仕事着と普段着

仕事着の準備 家の女たちは、家族全員の衣料の具合を毎日確認している。当然、一年中、雨の日や毎日の夜業仕事につきあ
と初おろし など繕いものもしていたが、すでに繕いきれなくなったものは新しく準備しなければならない。秋の収穫が
一段落するところから次の年の田植え前までの農閑期には、普段着と仕事着の準備をおこなった。

冬場に仕立てられた仕事着は、田植えにおろすのが普通であった。田植えは稲作農家にとっては一年の農作業のはじまりであ
り、かつ、一番大切な作業であり、さらに豊作を占う意味でも重要なハレ（晴れ）の行事であるので、神聖な心持ちで作業にあ
たり、服装も仕立ておろしの新しい仕事着でおこなった。仕立ておろしでなくとも、一番きれいな仕事着を着た。田内では、女
は赤いタシコ（襷）をかけ、山帯の上に白のヒボ（紐）を結ぶのがサツキ（田植え）の正装であったという。

新調の普段着は正月におろすということもある。着古した普段着を仕事着として着ることもあった。

仕事着

矢吹町では、田で働くのも畑で働くのも総じて山仕事とよんでいる。山仕事に着るものをヤマギ・ヤマツキ・ヤ
マツキモノとよんでいたが、最近では野良着・仕事着・作業着とよぶことも多くなってきた。

ヤマギ・ヤマツキ・ヤマツキモノは簡素で、実用的で動きやすく、かつ寒暑に適用してつくられ、汚れても差し支えなく、丈
夫で長持ちすることが最大の条件である。さらに、労働という観点から働きやすいように、全国どこの地域でも仕事着はたい
い上衣と下衣とに分かれている。

また、仕事着の布地は、矢吹町では木綿でつくられているが、女性民俗研究者瀬川清子の調査によれば、東北地方の隅々まで
仕事着に木綿が普及したのは日清戦争（一八九四）のころで、それ以前の仕事着というと麻布がほとんどで、柄も紺や黒や浅黄
色の無地であったという。今回、矢吹町の調査において収集した仕事着、また、各家々に残る仕事着は紺^{こんすい}紺と紺地に色物の縞



【写真1】主婦の仕事着
(昭和18年頃・提供 円谷ミツ・根宿)



【写真2】若い娘の仕事着
(昭和30年頃・提供 後藤助一郎・根宿)

柄が多かったが、このことは瀬川清子の調査結果と合致し、矢吹町に現在残っているものは日清戦争以降のものとなる。現存しなくても、木綿以外の仕事着について話を聞くことができないかと考え調査をおこなったが、聞くことはできなかった。

矢吹町の具体的な上衣としては、ジュバン・ハンコ・ハンキリ・袖なしがある。下衣にモモヒキ（股引き）・モンベがある。そのほか、男に山シャツ・乗馬ズボン・褌・ハバキなどが、女に山帯・前掛け・ヒボ・腰巻き・手指し・手甲・ハバキなどがある。

男は下衣に越中褌を着け、モモヒキを上衣のジュバンの上からはき、寒い時期にはジュバンの上にハンコや袖なしを羽織る。ジュバンは紺無地や細い縞柄が多かった。下衣に六尺褌をはく者もいた。

女は下衣に縞のモンベを上衣のジュバンの上からはき、寒い時期にはジュバンの上にハンコや綿入れを羽織る。矢吹町の女の人の仕事着姿をいい表す言葉として「縞のモンベに紺のチャンチャン」がある。チャンチャンはチャンチャンコともいい、袖なし半纏（ハンコ）の総称である。

さらに山帯、その上から前掛けをしめる。脛には脚絆やハバキをつけ、手労働者となっていた。隣村の表郷村では、男女とも下衣は紺のモモヒキをはいたが、大正時代のはじめごろからモンベをはくようになったといわれる。

ジュパンの柄は年齢によって違う柄が好まれた。若い人には緋や太い縞柄が好まれ、年配になるにつれて緋は小さい柄となり、縞は次第に細くなるようである。

矢吹町では、仕事のときに男は笠を被るかよじり手ぬぐいなどを、女は必ず手ぬぐいではつかぶりをした。笠や手ぬぐいなどの被り物については項を改めて記述をおこなう。矢吹町におけるおおよそ昭和三十年代ごろまでの伝統的な労働時の衣装姿はだいたいこのようなものであった。

昭和三十年代ごろまでの農家では、大人の着物として冠婚葬祭以外で着るものが、仕事着と日常着（普段着）が同じものであったことも、今とは大きく違っていた。ただし、葬式手伝いはヤマギでおこなった。こうした場合は、女性にとって一つの社交の場、他人に技量や器量をひけらかすことのできる場であって、特に山帯はあでやかな色合いのものを選び、しめたものだという。

昭和三十年代も後半になるとシャツを着るようになった。

山ジュパン

上衣には山ジュパン（山襦袢。ヤマジパン、単にジパン、ジュパンともいう）やハンコがあり、夏の山仕事には男も女も素肌（すだち）に山ジュパンを着た。ハンコは主に節句手伝いや葬式手伝い、カミゴトのときに着て山仕事には着ないというが、中には汗のかかないときの普段着として着る場合もあったようだ。また、山ジュパンはハンコより袖が細く仕事（しごと）がしやすく、山にいくときには男女とも山ジュパンの上にハンコを着て出かけた。

男の山ジュパンは身丈がひざまでの短いもの（短衣）で、丈が腰までのものと腰が隠れる程度のものがある。袖はゴミがはまらないように、また、仕事をするときに動きやすいように腕全体が細く短いスッポ、シッポ、またはツッポとよばれる筒袖（鉄砲、鉄砲袖ということもある）で、腕を動かしやすいようにと脇の下に襠（まち）をいれたり、中には脇裾に三寸ほどのウマノリ（スリット。切りこみ）をいれたものもある。また、後世の工夫であろうが、手甲を袖に結びつけて上衣と一体としたものもみられる。



【写真4】山ジュバン2 (提供 丹内昭子・三城目)



【写真3】山ジュバン1 (提供 丹内昭子・三城目)



【写真6】山ジュバン4 (提供者不明)



【写真5】山ジュバン3 (提供 高久サト・原宿)



【写真8】山ジュバン6 (提供 鶴飼トメ・白山)



【写真7】山ジュバン5 (提供 小林ハルヨ)



【写真11】山ジュバン9
ぬいぐるみじゅばん (手首にホックがある)
(提供 井上キク・田内)



【写真10】山ジュバン8
ねじりじゅばん (岩瀬系) (袖は切れていない)
(提供 井上キク・田内)



【写真9】山ジュバン7
ねじりすっぽ (大信系) (女もの。山仕事用。袖が三角に切れている)
(提供 井上キク・田内)

腕全体と胴部の布地が同じ場合を「縫いぐるみ（ヌツクルミともいう）」という。

女は古くは長い着物（ナガツキモノともいう）を着て働いていて、尻をはしより、下衣は紺のモモヒキをはいた。大正時代のはじめのころからモンペをはくようになったといわれることは先述した。

上衣の女用の山ジユバンはアブラゲ袖（身頃八寸に袖口四寸の三角袖をいう）が多く、仕事をするときにはタシコをかけ、素肌をさらすことで怪我をしないようにと手刺しを腕に巻いて手甲をつけることもあった。

山ジユバンは男女とも木綿地で、男用は紺無地か細い紺と浅黄色の縞織りが多く、女用は「肩切り」と称して肩から胸の前後ろ、襟の部分を紺縞の布地、腕と胸下、胴の前後ろを紺の木綿地にしているものが多い。矢吹町では「肩切りジユバン」とよんでいる。どの程度の肩切りにすればよいのかといった決まりごともあったようである。「胸の部分は二尺五寸で止まるのがよい」とされていた。

肩切りジユバンは矢吹・白河に多く、田内ではみられない。田内では紺地に襟だけが縞のジユバン（大信系という）や紺無地に襟と袖が縞のジユバン（岩瀬系という）がほとんどで、「田内以外の矢吹町では一般的ではなかった」と田内では話しているが、聞きとり調査を集約すると、田内以外のほかの地区で使われるようになったのは昭和以降のことであろうか。肩切りジユバンは矢吹町全域に残っている。

仕事着も長く着ていると破れもし、傷みもする。矢吹町には刺し子のものはみられなかったが（残ってはいなかったが）、傷んだところは別布をあてて繕い直したり刺し子を重ねることがあったという。

衣装として仕事着を見ると、山ジユバンの柄には年齢による差、好みがあり、男用は紺無地や細い紺と浅葱色の縞織りが多く、女用は年寄りには細くて茶色の縞、若い者は太い赤い縞が好まれ、同様に年寄りは細かい縞、若い者は太い縞が好まれた。「子持ち縞」の呼び名もある。ほかにも「縞は久留米縞が上等」「木綿素地には薄いものと厚いものがあり、会津木綿は厚く上等品であった」「縞袖は岩瀬の特色、とも袖は大信の特色」「会津縞は高価」、また「仕事着の柄や色は地区により違いがある」と

もいわれ、同じ仕事着でも素地の差もあった。

袖の形には、スッポ、シッポまたはツッポとよばれる筒袖・ゲンロク袖・船底袖・ネジリスッポ（よじり袖）など数種類がみられ、袖の特徴からシッポジユバン、ネジリジユバンなどとよぶこともある。

ハンキリ

ハンキリは裏地をつけない単衣で、普段着や余所いきとして着る場合が多いのに対して、ハンコ（山バンコ）は裏地がつきハンキリより多少裾が長く、九月から三月までの寒い時期にジユバンの上に着る野良着である。木綿地に緋模様のものが多い。



【写真12】ハンキリ1（提供 丹内昭子・三城目）



【写真13】ハンキリ2（提供 星信之助・大和内）



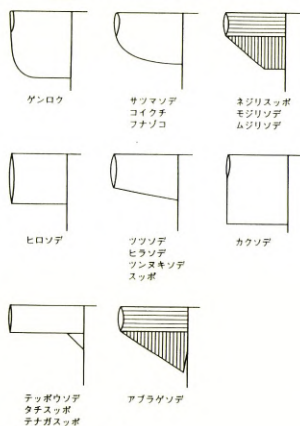
【写真14】ハンキリ3（提供 高久ヨシ子・原宿）



【写真15】ハンキリ4（提供 大野弘美・小松）

袖の種類

（『衣の暮らしと女性』より）



【図1】袖の種類



【写真17】ハンコ1 (提供 高久ヨシ子・原宿)



【写真18】ハンコ2 (ねじりすっぱ袖)
(提供 高久ヨシ子・原宿)



【写真19】ハンコ3 (ねじりすっぱ袖)
(提供 高久ヨシ子・原宿)



【写真20】ハンコ4 (提供 大野弘美・小松)

山バンコ
寒くなると山ジュバンのうえにソデナシ(袖なし)やハンコ(山バンコ)、半纏を羽織り、仕事やしやすいうにタシコをかけた。山ジュバンより袖が太く、寸法的に長衣に仕立てられている。

ソデナシには、衿にして綿をいれた綿入れ袖なしもある。雨天の田植えなどの水につかる作業は肌寒く、重宝した。

山バンコ・半纏は衿に仕立て、袖の形にはゲンロク袖・船底袖などがある。

極々寒いときには綿入れハンコを着、女性は山帯をしめたうえから綿入れ袖なしを着た。

ハンコは山ジュバンより単衣に仕立てられ、丈は腰あたりくらいまでである。

「緋のチャンチャン」ともよばれるように、襟を含めて緋の生地で統一されるといふ地区もある。



【写真16】綿入れ袖なし
(提供 丹内昭子・三城目)

男用は木綿地に濃紺の無地が多く、女用は濃紺の地に茶や赤などの縞織りで多彩である。袖は広口で船底袖・ネジリスツボなどがあり、女用は脇の下の方があいている。襟は紺色にすることが多い。

女性の普段着のハンコ（ハンキリ）には紺の柄が多い。袖に丸みをつけるが、丸みのつけかたは小さまざまである。袖付が八寸で袖口が四寸となるアブラゲ袖もみられる。身頃も袖も同じ布で仕立てたものはヌックルミという。外出のときに着て出かけることもあった。丈は男用が短く、女用が長い。

普段着・仕事着はハンコ、余所いきには同じ形でも上等なもので半纏とよびわけるようである。

モモヒキ（股引き）

男の underwear は、サルマタや禪の上に直接はくモモヒキがあった。

須賀川では男女ともにはいていたが、大正時代の末期にモンベが流行して以降、女性はモンベをはくことが一般化したといわれる。矢吹町でも男女ともモモヒキをはいていたが、格好が悪いというので女性には不評で、昭和の初期ごろから女性の underwear は次第にモンベにかわっていったといわれる。当時、普段着としても余所いきとしてもモンベの着用は常であったが、特に戦争中の昭和十七年に、厚生省生活局から戦時体制下の婦人の標準服が制定されて、モンベと腰切りの上衣を着ることが義務付けられてからは、仕事着としても一般化されたように思われる。

モモヒキは濃紺の木綿地で身頃・芯・ひき回しの三部分からなり、袴のように前後に分かれたものではなく、前身頃が後ろで交差し、ひもを前結びにしたものである。股下に襠がなく、前後とも股下が割れている。脛に密着し、腰部の前屈に楽で動きやすい形にできていた。



【写真22】モモヒキ2
(提供 矢吹トモ・三城目)



【写真21】モモヒキ1
(提供 丹内昭子・三城目)

モンペ

モンペがどこを経由しては
いつてきたのかは不明であ

るが、モモヒキの項で述べたように矢吹町でも古くは仕事着としては男女ともモモヒキをはいていて、昭和の初期ごろから女性の下衣は次第にモンペにかわっていったとされているので、それ以来の衣装ということになる。

第二次世界大戦後の主たる女の下衣はモンペである。モンペをはじめは腰脇が開き、袴と同様に左右二本ずつのひもを結んでしる山袴型のもので、ジューパンの上を山帯でしめ、その上からモンペのひもでしめて着るものであったが、次第に腰脇の開きが閉じられて、ひもからひもなしのズボン型のゴムいれにかわっていった。ズボン型のゴムいりモンペは着脱には便利であったが、かがむとゴムが伸びて胴の部分がずり落ちたり、野良仕事中に小用をもよおした



【写真25】モンペ3
(提供 星信之助・大和内)



【写真24】モンペ2
(提供 丹内昭子・三城目)



【写真23】モンペ1
(提供 丹内昭子・三城目)



【写真28】モンペ6
(提供 高久ハツ・原宿)



【写真27】モンペ5
(提供 大野弘美・小松)



【写真26】モンペ4
(提供 角田朋子・田内)

ときにモンペ全部をおろさなければならず、下半身が丸見えとなるなどの欠点もあった。

また、柄としては子ども用には太い縞柄、大人用には「子持ち縞」といって細い縞柄が好まれたが、色も年寄りには茶の縞が好まれ、若い人は赤の縞を好んで用いた。

しかし、モンペが畑仕事には向いても、水の中にはいる田の仕事にはだぶだぶで閉まりのないモンペは不都合で、依然としてこうした仕事にはモモヒキをはいていたが、モンペが一般的になると、田仕事にはいたときにはひざ下がゆるくだらしくならないようにひざ下と足首の上の二か所を藁やひもでしばって動きやすいように工夫した。

中畑では木綿地の会津モンペはあまりみられなかったが、第二次世界大戦後に一時期流行して、それ以来着るようになったといわれている。

山 帯

男の場合、仕事では山ジユバンを着、角帯の古いものをしめた。表郷村では明治三十年ごろからヘコ帯をしめるようになったという。

女は山帯をしめた。山帯は「ボロ帯」ともい、山ジユバンの上に巻く。大概幅八寸、長さ八尺ぐらいで、四寸幅に二つ折りにたたみ、二重に巻いて身体の後ろで結んでしめた。



【写真29】山帯1
(提供 角田朋子・田内)



【写真30】山帯2
(提供 高久ハツ・原宿)



【写真31】山帯3
(提供 丹内昭子・三城目)

腰にしめるとかたく安定感があるので山仕事にいくときに巻いた。農作業は山帯をしめてすることが女のたしなみ、あたりまえの服装とされていたらしく、ひもなどでしめているとだらしなないと陰口をたたかれた。

着れなくなった着物や使い古しのボロ布（古布）は捨てないで洗い張りをし、再利用する。細く裂いて緯糸に、養蚕の残りの屑繭からとった絹糸を経糸にし、柄、模様を工夫して自分で織った。昭和二、三十年代までは、どこの家にも織り機（ジバタまたはタカバタ）があつて盛んに織られ、こうした技術は嫁の仕事として母親や姑（しやうと）から教えられていた。織り機のない家では、近所の人に頼むこともあった。

夏用の幅のせまい一重帯はみられない。

現在矢吹町に残っている山帯の柄は市松模様など多様で、かつ、彩りもあざやかなものが多い。「出来栄えには織り手の女性のセンスがあらわれる」とされ、特に葬式などの冠婚葬祭の手伝いの場合は女性の社交の場、「おしゃれ」を競いあう場にもなっていたので、手伝い仕事の服装でも仕事着として着られるヤマギ・山帯はその意匠や技術を評価しあう、いわば品評会の様相で、手伝いに行くときには持っている山帯の何本のうちから特に自慢の一本をしめて出かけた。

襷（タシコ） 女は仕事をするとき、特に袖が筒袖ではなく、ネジリのネジリジュバンを着たときにはタシコをかけた。矢・ひも（ヒボ） 吹町ではタスキとはいわず、もっぱらタシコとよんでいる。

田内では、女は赤いタシコをかけ、山帯の上に白いひもをしめるのが田植えのときの決まった服装であつたという。

ひも（矢吹町では「ヒボ」という）もタシコも端布を縫いあわせてつくる。いろいろな柄の布を用いるので多種多様であるが、盆祭りの踊りではあでやかな浅葱色のタシコがある。三城目では山前掛けに赤いヒボするのが若者向きで、年寄りになると白色のヒボをつけるようになるという。



【写真32】タシコ
（提供 小磯キクエ・田内）

前掛け 山帯の上から

しめる。前掛けは木綿の紺緋がほとんどで、白色のヒボをつける。

短めの前掛けは、女の人にとっておしゃれでもある。

山前掛けともいい、三城目では緋地に赤いヒボにするのが若者向きで、年寄りになると白色のヒボをつけるようになるという。

写真52の田植え風景の写真では割烹着かつほうぎを着て田植えをしている風景がみられるが、それまではネジリジユバンが主流で、ネジリジユバンにタシコをかけておこなっていた。割烹着が着られるようになるのは、田内では第二次世界大戦後になってからといわれる。

手甲(テサシ) 手甲はテサシともよばれる。女は田植えや稲刈り、ムギの刈りとり、草刈りに手にはテサシをした。女は山ジユバンを着、タシコをかけて仕事をするので、

腕が肌をさらすことで怪我をしないように手の甲から腕の中ごろまでを覆う手甲をつける。トゲや切り傷、すり傷、虫除けになった。

男物は筒型、女物は手の甲を日焼けから守るためにベロという甲掛けがついていた。手首の部分には古くはヒボがついていて、これを巻いて固定させていたが、次第にコハゼで留めるようになった。肘ひじの部分はゴムをいれるが、ゴムが使われる以前はすぼめていた。



【写真33】前掛け1
(提供 高久サト・原宿)



【写真34】前掛け2 (提供 村社キヨ・三城目)



【写真36】手甲 (提供 佐久間貞子)



【写真35】前掛け3 (提供 塩田ハツエ)

また、男女とも木綿製の紺無地のものが多かったが、女性の中には好みの柄でつくる人もいた。地区により色が少しずつ違っていたともいわれ、大畑では紺、根宿・原宿では縞柄であったという。

ハバキと脚絆

冬の山仕事には、脛にハバキをつけた。脛を保護するとともに保温効果もあった。ハバキは足のものも形状にあわせて下がせまい筒状にとられ、上の部位にひもをつける。

布製と藁製とがあつて、布製の場合、濃紺の木綿が多く裏地をつける。間は爪で留めるようになっている。また、藁製の場合には藁のミゴ（芯の部分）を縦にとつて編んだ。

普 段 着

普段着をヘーゼーキモノ（平常着物）とよぶものの、矢吹町でも、特に農家では起きて寝るまでの一日の大半を仕事着のままで過ごしたため、仕事着と明確な差はなかったようだ。つぎあてのないものや汚れていないものを普段着にし、普段着が汚れて古くなると仕事着に回したり、また、布地のよいものや柄模様で普段着に決めたり、冬の綿入れを春に綿を抜いて袷にし、古くなると夏に単衣にすることもあったようだ。

『衣の暮らしと女性』（今泉令子著 歴史春秋社発行）には会津金山町の盆唄の歌詞のひとつ「盆が来たじめに浴衣も持たぬアワセほどいて盆過ぐす」がのっている。どの地方でも衣類にかける経済的なゆとりがなかったことが述べられているが、矢吹町でも一時代前までは同様で、余裕のない生活の中で女としてのおしゃれを創意工夫によって楽しんだ。山帯の意匠などはその代表例である。

さらに、山バンコの項で、普段着・仕事着はハンコ（ハンキリ）、余所いきには同じ形でも上等なもので半纏とよびわけていたことは述べた。意匠の上からも、全てではないが上衣の仕事着が仕事目的を中心に筒袖につくられているとすれば、普段着は、男用は角袖に、女用はゲンロク袖・船底袖が主になるなどの違いがある。



【写真37】ハバキ（提供 高久満蔵）

下衣でもモンペには普段着と外出用がある。野良仕事から帰るとモモヒキからモンペにはきかえる。

余所いき

普段着よりも上等なもの、よいものを余所いき（ヨソユキ）・イツチヨウラなどとよびわけた。さらに上等な着物は冠婚葬祭に着的礼服用で、男女とも紋付が正式とされた。

下 着

褌には六尺褌・もっこ褌（三尺褌）とがあるが、もとは六尺褌が多かった。子どもは小さいうちは褌や腰巻をつけず裸の上に木綿の着物などを着た。男女とも下着をつけるようになるのは成長の度合いからで、男は陰毛がはえはじめる一五歳くらいになると褌をするようになり、女は初潮をむかえる一三歳ぐらいに腰巻をしめた。

こうした下着も男はパンツやブリーフに、女はズロースからバンタイへとかわったが、『福島県史』第23巻民俗Ⅰによると「昭和二十四、五年ごろの衣服に関する調査資料をみると、旧制中学校の生徒たちでふんどしを用いている者は最上級生で二割くらいとなっている。年齢からいえばたいてい一六、七歳から用いはじめたといい、やはり白が多かった」とある。

女の下着は普段はジュバンと腰巻で、野良仕事では腰巻を短く折ってその上にモモヒキやモンペをはいた。ズロースをはくようになったのは太平洋戦争中からという。

三 晴れ着

晴 れ 着

全国的には、冠婚葬祭などが「ハレ（晴れ）」の日ならば、それ以外の日が「ケ（袈）」（普段の意味の古語）であり、以前は九州の島々などで袈着（ケギ）という古風な言葉が使われていた。しかし、現在ではほとんどこ



【写真38】余所いきの帰り
（買物帰り・昭和31年 提供 渡部恭行）

した呼び名は使われず、もっぱら「普段着」という言葉が日常生活での着物の共通の呼び名となっている。

今も昔も「晴れ着」という言葉は全国どこにいても共通の言葉として使われている。そして普段着が豊富に、かつ良質に派手になるほど晴れ着はそれ以上に派手に豪華になっていく。晴れ着が普段着とはいかに違うか、なぜ違うのか違わせるのか、わたしたちはあたりまえのように考えているが、晴れ着とはまさしく「ハレ」の日そのときに、できるかぎり豪華に着飾って華やかにする盛装といえる。

冠婚葬祭と衣装

冠婚葬祭はいわゆるハレの日であり、それぞれにその目的にあった特異な衣装が定められている。

例えば、人生の儀礼としての服装には、妊娠時の腹帯（岩田帯）の着帯、誕生のエナギ、背守り、七五三の服装、腰巻祝い、禊祝い、結婚式の服装、還暦の頭巾と着物、葬式時の喪服と死出装束がある。また、年中の行事においては正月、盆、祭り、そのほか各種行事のときの羽織・袴など神や仏を迎える服装がある。

南会津郡田島町では「女の人が羽織を着ると、世の中がさかさまになる」などという。羽織・袴は男だけに許されたハレ着であり、私的な行事以外には女が着ることはなく、めったにみられない女の人の羽織姿がみられたときには「何事かあったか」といわれる例えの諺であろう。

また、祝儀と不祝儀の着物を別々にあつらえるようになったのは第二次世界大戦後のこととされる。それまでは、女性の婚礼衣装は紋付の小袖で、結婚式の後はそのまま呼ばれごとや喪服にも着られ、一生をとおして冠婚葬祭用の衣装とされた。複数枚を用意するのではなく年間をとおして使われるので、季節によってはその上に羽織やモンペを着用した。



【写真39】晴れ着・江戸後
(提供 角田静子)

腹帯の着帯

妊娠五か月目の戌の日に、安産への祈願としてサラシ木綿の腹帯（岩田帯）を着帯する習俗は全国的におこなわれている。矢吹町ではサラシ木綿で巻くことが多かったが、夫の禪や建前のように飾る五色の旗も「安産になる」といつて巻くこともあった。

エナギ・産着

エナギ（イナギ）とは、生れるとすぐに赤ん坊に着せる着物のことをいう。エナギのエナ（イナ）とは臍（へそ）の緒を意味し、臍の緒のとれないうちに着せる着物のこととされ、古くはボロ布で包んだといわれるが、矢吹町ではエナギの言葉さえ聞かれず、実際にそうした人はいないと思われる。

今は、赤ん坊が生れるとすぐにサラシの肌ジュバンに包み、その上に木綿の麻の葉模様の産着を着せる。地域によってはナスの花柄にする所もあるが、矢吹町では麻の葉が一般的で、魔除けになるといい、男の場合は青色、女の場合は赤い麻の葉模様の産着を着せる。冬には肌ジュバンだけでは寒いので、綿入れ胴着を着せる。

産着は大概長男・長女にだけつくられ、次男次女以下にはそのおさがりを着せた。

このほか、夜泣きしないようにとの呪い（背守り）としてヤマビコ（山蛾の繭）を着物の背中襟下に糸で括りつけることもあった。

ヒトツミ・矢吹町では、子どもが生れると、歩くようになってからも着ることができるようにと、長めに着物をつくることミツミ・ヨツミが一般的であった。これを「ヒトツミ」という。ヒトツミの着物は平袖にし、一枚の布で背中に縫いあわせがないように仕立て、三歳ごろまで着せていた。

昭和二十年代ごろまでは子どもでも着物を着ていることが多く、子どもが成長するにあわせて「ミツミ」「ヨツミ」の着物をつくり、本裁ちの着物を着られるようになるのは一二、三歳になってからであった。

ヒトツミ、ミツミ、ヨツミは身の寸法に違いがある。ヒトツミは前述のように三歳ごろまで着るが、ミツミは並幅一反の半分の布で仕立てる。ジュバンや長着物などがあり、おおよそ三、四歳くらいの子どもが着る。着せる期間が短いので、ヨツミを

幅をせまくして縫い、着せたりもした。ヨツミは並幅の身丈の四倍で身頃を仕立て、本裁ちの着物を着られる前のおおよそ四歳ごろから一〇、一歳くらいまでの子どもが着た。

結婚式の衣装 女性の婚礼衣装は紋付の小袖で、その後はそのままよばれご

・葬式の衣装 とや喪服にも着て、一生をとおして冠婚葬祭用の衣装とした。

手伝いの女性の服装は普通の仕事着であった。仕事着ではあったが、大勢人が集まる場であるので特に意識して、汚れていないお気に入りのものを着たという。このときにしめる山帯は、柄の美しさと織りの技術を披露するための品評会や社交場としての意識もあって、特に自慢の一本をしめて出るようにしたという。

盆・正月と衣装

正月には、一家の主人は羽織・袴姿で若水を汲み、正月を迎える。どこの家でもということではないが、ほかの家族は新しい綿入れ、モンペ、足袋をはいて祝った。

四 被り物と履物

被り物

農作業では、男女とも手ぬぐいを被った。男はハチマキにすることが常で、寒いときやノゲなどが飛ぶ仕事ではホッカブリにした。

雨の日や日差しの強い日に、男は菅笠や帽子すげがさを被ることもある。菅笠や帽子を被って仕事をするときにも、首には手ぬぐいをかけて仕事をする人が多い。女は手ぬぐいを頭の後ろで結んで被り、男と同様、寒いときやノゲなどが飛ぶ仕事ではホッカブリにすることもあった。また、襟元に手ぬぐいを巻いてノゲがはいるのを防いだ。笠の着用は男と同様である。



【写真40】結婚式の衣装・打ち掛け
(提供 矢吹婦人会)

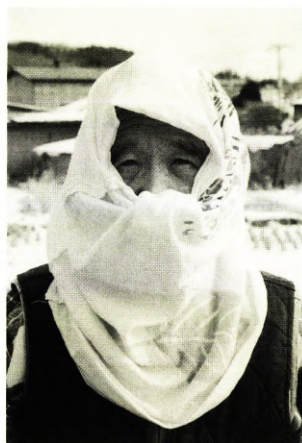
そのほかに、「須賀川市文化財調査報告書」や『失われゆく百姓の心』（遠藤輝之助著・泉崎村）には男の被り物として、ゴミ除けや防寒用として頭の上からスッポリと被る藁製の「ニゾウ」や布製の「ドウモッコ（ドモッコ）」があり、須賀川市では昭和五十年ごろまで使われていたというが、矢吹町では聞くことができなかった。

手ぬぐい

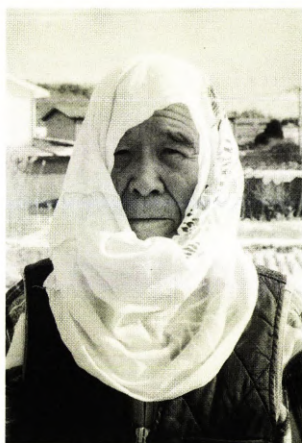
手ぬぐいは仕事のときと普段では被り方が異なるが、女の場合、一年中ほとんど毎日使っているので切れてしまうことが多い。年間二、三本（筋）は使うが、貰いものとしての商店の名前などがはいった宣伝用の手ぬぐいもあるが、収集した写真には真っ白な手ぬぐいが多く、矢吹町ではほとんどを各家で用意したものと考えられる。

女は手ぬぐいをウシロツカブリに被り仕事をする人が多いが、田植えなどでは汗と日焼けを防ぐ意味でホツカブリでおこなった。脱穀作業などではノゲが首筋にはいりこまないように首には手ぬぐいを巻くことが多い。

須賀川市・長沼町・大信村大屋地区や先述の『失われゆく百姓の心』にある手ぬぐい二本を縫いあわせて被り物にする「二筋手拭ふたすぢてぬぐい」（または「二本手拭」）は矢吹町ではみることができなかったが、田内では、昔は二本手ぬぐいを使っていたという。



【写真42】ドウモッコ2
（提供 小磯忠三・田内）



【写真41】ドウモッコ1
（提供 小磯忠三・田内）



【写真44】手ぬぐい2（ウシロッカブリ）



【写真43】手ぬぐい1（ウシロッカブリ）



【写真46】手ぬぐい4（アゲッカブリ）



【写真45】手ぬぐい3（アゲッカブリ）



【写真48】手ぬぐい6（アゲッカブリ）



【写真47】手ぬぐい5（アゲッカブリ）



【写真50】手ぬぐい8（ホッカブリ）



【写真49】手ぬぐい7（ホッカブリ）

（提供 円谷ミツ・根宿）

笠

田や畑での被り物に女も男もチョッペ笠がある。雨の日の作業には、男も女も菅笠を被る。古くは自家製のものもあったというが、ほとんどは地区内もしくは矢吹の雑貨屋（カマヤ）などから購入した。

日よけには、麦わら帽子なども被った。

蓑

雨の日の田や畑での仕事では、雨除けのために雨蓑を着る。藁蓑とヒロ口蓑、カヤ蓑があるが、ヒロ口蓑は水分をはじくが、藁蓑は水分を含んで重くなり、かつ長持ちしない。

矢吹町ではヒロ口蓑、カヤ蓑は見かけず、雨蓑としても藁蓑だけであったという。肩のはったカメノコ蓑と肩の丸いダテ蓑の二種類があったが、どちらも主に雨の日の草とりやサツキ（皐月）などに着た。

そのほか、蓑には炭焼きや木背負いとしての背負い蓑の役割もある。中には、藁製で肩にかかるひもの部分を広くとった背あて（背中あてともいう）があった。ヤセウマとともに荷物を背負うときの運搬補助具であった。

ヤセウマは山間部のもので違って、背負ったままでの休憩が楽なように足の長いことを特徴としている。

山仕事と履物

田や畑に出るときには家からアシナカ（足半）をはいていき、畦あぜに脱いでおいて裸足で仕事をする。以前は朝起きて一度土間におりると、それからはアシナカをはくこともなく田畑に出かけ、一日中裸足の生活になったという。「二ワトリと同じだ」といわれるのも、そうした理由による。水虫ならぬツチムシにおかされたのもこうした時代である。

一日中が裸足での生活にかわったのは、戦後の自動車の普及が影響した。自動車は商業の発展と生活の改善、生活圏の拡大に大きな成果をあげていくことになるが、増加するほど道路に轍わだちをつくり傷めるので、行政ではその補修のために砂利をしいた。小さな集落道・村道などは地区内での道普請として共同作業で毎年補修はしていたが、結果、砂利道がほとんどとなって怪我をしてしまったため、田畑仕事の往復を裸足ではいくことができなくなった。こうしたことにより、矢吹町ではアシナカや草履はくようになったともいわれる。

第一節 衣



【写真51】コジュハン風景(提供 後藤助一郎)



【写真52】田植風景(提供 後藤助一郎)



【写真53】 精米風景 (昭和15年頃) (提供 後藤助一郎)



【写真54】 縁先風景 (提供 後藤助一郎)

草刈りなども素足で藁草履をはいた。

仕事以外でもアシナカや草履をはく。アシナカははくとかかとの部分がはみ出る。一方、草履はかかとの部分まであって、家の中での上履きに使ったり村内の近くに出かけるときなどにはいた。材料に藁のほかトウモロコシの皮・竹皮・布の端切れなどを使った。

五 寝具

寝 巻 き 以前は、風呂あがりや寝るときに着る丹前をかけた。冬には綿を厚く入れたカイマキが使われた。

昔は板の間に藁束をしき、その上にシビブトンをして、シビブトンの上に薄い敷布団をしいた。

シビブトン 十月はじめての秋祭りのころから、藁仕事で藁をすぐって出たシビ（藁布団）ビ（藁屑）を干し、シビブトンをつくる準備がはじまる。すぐって乾燥したシビをショウフ袋や布団にする袋にいれてできあがる。秋につくり、春には袋から抜いて肥やしにする。毎年秋につくりかえる。

若者夫婦はザシキに、夫婦は納戸^{なんど}に寝るが、それぞれ板の間に藁束をしき、その上にシビブトンをして寝た。部屋に藁をしく場合、散らからないように板や藁束で囲いムシロをしいた。

板の間も藁束からムシロに、さらに畳敷きへとかわり、昭和四十三年ごろに



【写真56】 カイマキ
(提供 円谷ミツ)



【写真55】 カイマキ
(提供 円谷ミツ)

エバーソフトが出回ってからはシビブトンもなくなったが、シビブトンは弾力があって、かつ保温性に優れていたのだから、布団もあまり厚くないものでもよく、ほとんどの農家では冬には必ず使用した。

昔は親が寝る部屋の隣りに若い夫婦が寝ていた。シビブトンの上で動くと藁の擦れる音がする。身体をよじっただけでも音がするので、夫婦の営みで身体を動かすと藁の擦れる音が隣の部屋にも洩れ聞こえ、翌朝には親から、「昨夜（ゆうべ）は音がしたな」とか「うるさいから、あまり身体を動かすな」などとよくからかわれた。

六 裁縫と洗濯

裁縫道具と針仕事

女は嫁にくる前に寺や名主、または裁縫の上手な人の家にいって針仕事を習ったというが、農家では嫁にきてから姑に教わったという人も少なくない。

矢吹町には「八月洗濯」という言葉が残っている。サクワケ（七月の草刈り）が終ると、家族のジュバンやモンペなど山着の繕いをして秋の農繁期に備える。忙しくなる前にその準備を整えてから嫁が実家に帰ることをいい、年中忙しい嫁に、しばし心も身体も癒させる心づかいの意味もあろう。

また、衣服全体の管理は冬におこなうのが一般的であった。「裁縫と機織は冬の仕事」ともいい、急ぎ繕う必要のものを除いて冬におこなった。中畑では、稲の収穫「アキマデ」が終ると機織をしつらえ、冬をとおし春までの女の仕事として準備した。

洗濯仕事

洗濯は女の仕事であった。昭和三十年代後半から昭和四十年代にかけて電気洗濯機が一般の家庭に普及するが、それ以前はタライと洗濯板が使われ、家族全員の入浴が終った後の残り湯や近くの流れ水でおこなった。洗濯板を持たない家もあり、そうした家ではタライや流れ水での揉み洗いであった。

以前はサイカチの実を草刈り籠にいっぱい背負ってきて、衣類の洗剤に使っていた。また、洗濯洗剤としては利用しなかった

が、灰は鍋などの洗剤として利用された。イロリ（囲炉裏）の鈎と鉄瓶は毎日ピカピカに光らせておくことが嫁の仕事であった。特にイロリのホド灰は油污れに効果があつたとされる。

戦中ではあるが、物のない時代にはアカベナ（赤い粘土）が洗髪やそのほかの洗剤として使われたが、あまり効果はなかつたという。

防虫と虫干し

着物を食う虫をスムシという。スムシは湿気とある程度の暖かさが原因で発生するが、防虫剤には煙草の干し葉や新しくなつては樟脳が使われた。石鹼も防虫に効くといい、筆筒や長持ちにいれておくこともあつた。また、新聞紙の油性インクが虫除けになることから筆筒の下にしいた。

田内では「絹はスムシが食わない（同じ虫類だから食わない）。だから、虫除けなどいれない。防虫剤は木綿着物に使う」というが、中畑では逆をいう。

虫干しは土用干しといって夏の土用の時期におこなつた。

収 納

筆筒や長持ちがあるが、ほとんどの農家では余所いき着物などは筆筒や長持ちにしまつておいたが、普段着や山着は行李にしまい、寝部屋の枕元や畳の上においたり、四月から十二月二十八日までの畳をあけている期間はある。筆筒や長持ちも主屋にはおかず、蔵のある家ではその中においた。